

津村孝平：国立科学博物館の珪藻標本について Kôhei TSUMURA: Collection of diatom slides in National Science Museum of Japan

現生および化石の海産珪藻類の第三回シンポジウム (Third symposium on recent and fossil marine diatoms) の Proceedings (1975) に G. A. PRYOZELL が調査した珪藻標本を蒐集し保存している各国の研究機関または個人の名称と所在地などのリストが公表されているが、遺憾ながら日本の研究機関も個人もその中には載っていない。これはそのリストを作るためのアンケートを受けた日本人が珪藻標本を保存している研究機関か個人が日本には無いだろうと思って応答しなかったのかどうかはわからない。

日本人で珪藻の研究したのは私が文献上で知っている限りでは遠藤吉三郎 (1905) が最初で、それ以後、極く少数の人ではあるが珪藻の研究をした者がいたし、太平洋戦争の終戦後の混乱がおさまった頃からは珪藻を研究する人がかなり増加して来たので個人的には相当多数のコレクションはあるものと考えられる。しかし一般には珪藻はただ混種プレパラートを保存しているだけだろうと思えるからそれを直ちに珪藻の種類を区別して保存した標本と言えるかどうかという問題もある。

欧米では既に 1800 年代の末には珪藻の単種プレパラートが販売されたこともあったが、1900年に TEMPÈRE et PERAGALLO が、珪藻の混種プレパラート 1000枚を 1組としたものを Les Diatomées du monde entier として分譲した。この 1組の混種プレパラートを買うと Diatomées du monde entier という 1冊の印刷物 (書物) が添付されていて、この書物には各プレパラートの番号と産地を見出項目にして、そのプレパラート中に封入されている珪藻のすべて (?) の学名が列記してある。この書物の学名索引を見ると、それはページではなくて、混種プレパラートの番号が索引できるようになっている (従って 1つの学名に対するプレパラートは 2枚以上になることが勿論ある) のである。その番号のプレパラートを鏡検して探せば目的の珪藻は見られるというのである。但しその混種プレパラートの中のどの個体をその学名の種と見るかは鏡検者の判断 (知識) によるのである。このプレパラートは珪藻の研究上にかなり役立つものであることは事実だと思うが、どの個体をその学名の種とみるかは鏡検者の判断によるのであるから、判断の誤りは当然生

ずるだろうと思う。外国にはこの組プレパラートを購入して所蔵している研究機関も少しはあるらしいが、日本には勿論それを所蔵しているらしい研究機関も個人もない。しかしこの組プレパラートはあまり多数組は分譲を受けた者はなかったらしくて、私がいろいろのことから推定したのでは、せいぜい多くても 10~20組ぐらいなものだったらしく、はっきりとそれを持っているらしいところは数箇所しかない。但しそのプレパラートを買わなくても、その印刷物 (TEMPÈRE et PERAGALLO (1915): Diatomées du monde entier) だけでも分与したらしいのであって、私は昭和 13年 (1938) 頃であったが、この書物だけなら外国の古書店から取寄せたのを持っていて、太平洋戦争の戦災に会った前夜にも見ていた時に空襲の警報が発令されたため、自宅の金庫に入れて置いたのだったが、他の文献などは別の倉庫に入れてあったので、翌日の空襲で自宅もその倉庫も全焼したが、金庫に前夜入れていたこの書物だけが私の戦前の珪藻関係の文献や標本では唯一つ焼残っただけの悲惨な思い出の物である。但し私は終戦後 10年ほど経た時に、ある偶然の機会に、恐らくは TEMPÈRE がその組プレパラートを作るために世界各国から入手した材料一部だろうと推定される材料数件をドイツから入手した。その材料の産地名が全く T. et P. のその印刷物にある地名と同じで、鏡検してもその印刷物に載せてあるのと同じ種が見られる。

初めに書いた G. A. PRYOZELL が掲げている研究機関の中には T. et P. のこの組プレパラートも所蔵しているらしいところもあるし、昔は混種プレパラートの中に某種が 1個体でも存在していれば、その混種プレパラートにその某種の学名を記して、その種の標本として扱ったこともあるらしいし、また後の時代には標本指示器によって混種プレパラートのカバーガラスの上に、その種のある部位に小円を刻印して指示標識として、その混種プレパラートを保存した例もあり、また単種プレパラートを保存した例もあるから、G. A. PRYOZELL が掲げている研究機関等に所蔵されている標本というものの中には、そのいずれのものも含まれているはずであり、また昔は採集したままの珪藻 (主に大体が同一種だけの群体) を紙片とか雲母板とか滑

石の板の上のせて乾かしただけのものをパラフィン紙のようなものでおおっただけの珪藻標本もあったらしいから、それも多くはないだろうが含まれていると思われる。

日本でも前記の遠藤吉三郎(1905)以降の各研究者の標本が仮りにホルマリン漬でも、カナダバルサムを用いた混種プレパラートで、種類の指示標識などが全然つけてなかったとしても、それがすべての各研究者のものでなく、みな1900年代になってからのものであるが、英国やドイツその他では1820年頃からの標本が創立の古い研究機関などに保存されているのに比して、日本にはそういう標本を保存しているところがないのは全く惜しいことである。しかし日本でも近年は各研究者の手もとにはその研究に相応した珪藻の標本が保存されているとは思いますが、個人の生存期間などというものは限界があるので、それが永久に保存されるのかどうかを考えると、その中の永久に保存して置きたいものだけでも、責任を以って保存され得る公的研究機関へ寄贈などして保存させるべきではなかろうかと私は思っている。

日本では近年は新種などを命名して、自分が在職している大学の研究室などへ標本を保存したと書いてあることがあるけれども、その大学にそれを責任をもって保存管理する用意があるのかどうかははっきりしていない例も多いのではないかと思う。

それで私は国立科学博物館の研究部内に珪藻プレパラートの保存系列を設けてもらい、そこへ寄贈すれば誰の1枚の寄贈でも受入れて責任をもって保存してもらえる先例を作った。これはその出発が1~数枚のような少数で、その後の増加が余りにも遅いようではその保存系列の廃止ということにならぬとも限らないから、私は2~3の知人にも勧めて、頭初に200余種を寄贈することから出発させたのであったが、それが昭和58年末で750種、枚数では1000枚に近い数になっているから、もうこの保存・管理が廃止されることはないと思うので、珪藻研究者各位も良い珪藻プレパラートを持っておられたら、ここへ寄贈し保存してもらいをお勧めする。これは新種命名のものは勿論であるが、既に科学博物館に保存されている既存学名のもの

のと重複しても受入れて保存してくれるのである。

しかし科学博物館のこのコレクションは種類を区別して明示したプレパラートであることが条件になっているから、1) 単種プレパラートか、2) 単種培養した材料またはほとんどが同一種の集団の材料(それらの中に極く少数の他種が混在している程度なら差し支えはない)で作った俗に言うコロニー・プレパラートか、3) 拭いても抹消できない方法により、目的種を明示する指示標識をつけた混種プレパラートであることが必要である。寄贈するにはプレパラート1枚毎に保存、管理上に必要な項目を記入した書面(用紙は科学博物館に用意してある)を添付することになっているから、寄贈するには事前に博物館の係員と連絡して、その指示に合うようにしなくてはならない。

またこの標本(プレパラート)は事前に訪館の日時を打合せて行けば誰にでも閲覧(鏡検)させてくれるから、研究者各位がなるべく多くの種類を博物館へ保存させることによって、寄贈者自身も他人の寄贈した種類を見得る数が増加するわけで、相互に研究上の便宜を得ることができるのである。

現在までに科学博物館にどんな種類が保存されているかは、実はそれが300余種であった時に仮りの臨時リストを博物館が印刷したこともあって、その中だけにでも閲覧する必要があるであろうと思えるものがかなりあるが、現在はもうそれが750種にもなっているから、そのリストだけではもう役には立たないので、今後は所蔵種が1000種になったときに次のリストを発行される予定になっている。従って、それ以前に寄贈した種類はそのリストに載るであろうが、それを過ぎると次の1000種に達するのは、もう寄贈され易い種が蒐ってしまっているから、そのリストの発行はかなり遠い後のことになると考えられるから、もしプレパラートを寄贈する希望をもっておられる研究者は、なるべく早く寄贈される方が良いかと思う。

付記 この国立科学博物館の珪藻プレパラートの寄贈や閲覧の方法については東京都新宿区百人町、国立科学博物館研究分館 桑野幸夫博士がcuratorになっておられるので、照会は同博士になされることをおすすめする。(221 横浜市神奈川区松ヶ丘14番地)